



OBI創立15周年の感謝

アドナイ・イルエから

エベン・エゼルへの道は続く



理事長 学院長

増田 誉雄

過ぐる11月21日、「創立15周年」という道標が立てられましたことを、この紙面をお借りして感謝し、皆様に御礼申しあげたく存じます。

アドナイ・イルエ「主の山に備えあり」なるお方の導きをいただ

き、「あすは主の不思議」(ヨシュア記三五)の約束におすがりして15年、とうとう「エベン・エゼル」(ここまで主が私たちをたすけてくださった)と主に感謝をおささげするに至りました。

このようになりました背後に

は、皆様方の熱いお祈りとご協力、ご支援がありましたことを深く深く思わされる次第です。

例えば、宣教の拠点として、アイルランド出身のウェブスター・スミス宣教師が終戦後、主の奇跡としてこの場所を入手(六百五十万円)したのは1949年12月のことでした。宣教の推移の中で1970年代、当時のセンター理事長、羽鳥明師が教育活動の必要を訴えられました。その機が熟するのには1983年まで待たなければなりませんでした。南館の完成とともに、教育部活動を開始。やがて、新しいビジョンと体制が求められることになり、1991年、お茶の水聖書学院が誕生しました。それは、まさに絶望状態の中での立ち上げでした。支えとなったみことばは「(アブラハム)は望みえないときに望みを抱いて信じました。」(ローマ四18)と創立者ウェ

ブスター・スミス師が愛したシリア語訳の箴言「あなたが歩む一歩一歩 私はあるあなたの前に道をひらく。」(箴言四12)でした。

つづいて、2001年、新生OBIとして自立の歩みが始まりました。教師の先生方にも、スタッフの方々にも、犠牲使命集団となることをお願いし、厳しい戦いを共にしていただいたことでした。また、卒業生の方々にも理事会に加わっていただいたり、強力な後援会作りをしていただいたりとご協力をいただきました。そのような中で、山崎製パン株式会社取締役社長飯島延浩様よりのご厚意溢れる支援は主の不思議の証しでした。

こうして迎えた感謝会でしたが、「あなたの天幕の場所を広げよ。」(イザヤ書五十四2)とのさなるチャレンジに共に歩ませていただきました。お祈りとご協力をお願い致します。

OBI創立15周年記念特集

主の守りと導きの15年に感謝

2005年11月21日お茶の水クリスチャンセンター8階ホールにて「お茶の水聖書学院15周年記念の集い―感謝と展望―」が開催された。式典は、OBIの働きに尽力された来賓の方々、OBI卒業生・在校生など120名ほどが出席し、主の祝福のうちに執り行われた。

15年の感謝と展望

第1部の感謝礼拝は、オルガンの前奏、賛美と祈りのうちに厳かに神への畏敬をもって始まった。増田誉雄学院長によるこれまでの感謝、世良田湧侍副学院長によるこれからの展望、植木朋子音楽講師による特別賛美を通してOBIの15年がいかに祝され、大きな使命を与えられているかを再認識する時となった。

主のビジョンに焦点を合わせて

羽鳥明名誉学院長は、第2コリント5章9

「21節を通して「主に喜ばれること」はパウロの奉仕の土台であり、OBIの基礎を築いてきた諸先生方の歩みそのものであったこと。これをOBIで学んだすべての主にある兄弟のビジョンとして歩み続けて欲しい。主のビジョンを自分のビジョンとして働くそれがOBIというOBIへのメッセージを伝えた。

日本社会が神に喜ばれるための起爆点

引き続き来賓の飯島延浩山崎製パン株式会社代表取締役より、OBIが日本における福音伝道の殿堂であり、起爆点となることへの期待を込めた祝辞が語られた。それは本質を見据えた信徒教育の場、すなわち日本の実情を正確に見出し、日本社会が神に喜ばれるために、OBIが1%の壁を破るための働き人の育成という大きな働きへの使命を与えられていることを実感させるものであった。

同じく来賓の村上宣道お茶の水クリスチャンセンター理事長からも、OBIとその卒業生の働きが個々人、各教会、さらにはキリス

OBI創立15周年記念感謝献金

(敬称略)

米田由起子 佐野謙次 上田留美子
永井みよ子 滝田幸恵 脇坂勇
三友庸子 倉沢薫代 南谷富美江
尾原光彦 窪井節子 杉山礼子
福井ちよ 松岡常子 田澄子
増尾善文 内田光子 国東恵子
関節子 菅井正道 安藤良一
小林喜久男 瀧瀬貴 三浦喜代子
戸川偕生 中川和代 北村久夫
増田慶子 牧野三恵 酒井美音子
浪井弘子 須子都 中島總一郎
菊田洋子 飯島多稼夫 森本馥
西川和子 木下寿子 森登・柳子
平松庸一 伊藤洋子 田中恵子
江藤博久 堀口容子 小林直子
砂谷智枝 依田和子 増田誉雄
目崎由起子 世良田湧侍 窪田淳子
宇佐神進 加茂康一 伊藤淑美
経堂めぐみ教会 三木晴雄(玉の肌)
国松裕子 同窓会一同
村上宣道(OCC) 羽鳥明
阿部直子 今井省吾

ト教界全体のレベルアップにつながり、教会や社会に、より大きなインパクトを与える大きな前進への期待が語られた。

各々の働きの場へ

第2部は関係諸氏による特別賛美と祝辞の中、主への感謝と旧交を温めあう祝福されたひと時でレセプションの幕を閉じ、各々の働きの場へ遣わされて行った。

文：宇佐神 進（第1回卒業生）



OBIの展望

「OBIの今後の展望」についてMで始まるミッション、メディア、マンツーマン、マスターズ・プランが考えられます。

まず第1は、ミッションつまり、OBIの使命を再確認することです。これまで、「大宣教命令に従って、主と教会に仕える」ということで進んできました。今後とも、これを発展的に続けていく必要があります。

第2には、メディアの活用ということです。それは、教室の中で行われる聖書の授業を、インターネットを使って、教室の外に向けて拡大していくことです。そして教室をヴァーチャルに拡大し、全国に拡大することです。

第3は、マン、人です。すべて主にある「人々」を主が用いられたということの結果です。その中に、学院長、教師、在校生・卒業生、後援会の存在等があります。

最後に、マスターであるイエス・キリストのお働きであります。主のみわざとしてのOBIの教育活動は、主のご計画があるだけです。今後とも発展的に進めることを祈ります。それがOBIの「マスター・プラン」です。

副学院長 世良田湧侍

荒巻嘉文（CLC） 阿部信夫

西脇達子（元OBI音楽講師）

遠藤かおる 斉藤孝子

有田貞一・美栄子 JEMA

島塚啓子 藤原導夫

柴田幸士（三島キリスト教会）

辻岡健象・敏子 斉藤とし子

加藤恵司（向島キリスト教会）

浅見鶴蔵 石川弘司（中野教会）

早矢仕宗伯（東川口福音自由教会）

三浦秀彌 柳澤光子

【協賛広告献金者】

山崎製パン（株）社長室

玉の肌石鹸（株） 羽鳥 明

島田福安 西 満 佐野謙次

増田誉雄 世良田湧侍

藤原導夫 福井誠 平松庸一

飯島多稼夫 金本悟

近藤はるみ 三浦喜代子 森 登

小林喜久男 堀 肇

植木朋子 内藤真奈

東京中央バプテスト教会

OBI事務局一同 OBI同窓会

教会音楽デー

教会音楽コースの特別講義から始まったこの催しも、教会音楽デーと改まり今年で6回目を迎えました。今年度は「聖歌隊の役割」というテーマのもと、講義を遠藤嘉信先生（和泉福音教会牧師）、合唱指導を飯島千雅子先生（東洋英和女学院大学教授）にご奉仕していただきました。



講義では第二歴代誌五章1～4節より「神殿礼拝における賛美」について学びました。聖なる神をおそれるとは、聖書の理解に基づいて一致するとは、主に受け入れられるとは、など聖歌隊の奉仕に携わる者だけでなく礼拝者のひとりとしても知るべきことをわかりやすく、そして深く教えられました。

今年ではじめての試みとして聖歌隊の発表の場が持たれました。予めお申し込みいただいた、5つの教会とOBIの聖歌隊の皆さんが自由曲を用意して下さり、ふだんあまり聞く機会のない他の教会の聖歌隊の賛美に耳を傾ける幸いな時となりました。

合唱指導では呼吸法や発声法、賛美についての姿勢などを学びつつ、参加者全員が「我は復活なり生命なり」（G・ドレスラー曲）のご指導を受けました。最後に共に心を合わせて主を賛美し、教会音楽デーの一日が恵み

のうちに終わりましたこと感謝をもつてご報告いたします。

教会音楽コース

遠藤かおる

「ネット・コースについて」

今年4月から始まったOBIネット・コースでは、すでに7名の方が学びを開始されました。さらに4名が登録中です。

科目は秋になって、さらに5科目増え、合計10科目を受講することができます。ますます多くの方々に、このコースを活用していただきたいと祈っております。

これはOBIの教育をメディアを使って、教室の中で行われる授業を、さらに教室の外で受けることができるようにしたものです。それは今様のインター

ネットを通して、ヴァーチャルに、OBIを全国に拡大することであり、OBIの全国版です。

日本中には、いや海外でも、お茶の水のクラスで学んでいるように、聖書を学びたいという方々がいらっしやると思います。いやきつとおられると信じています。

しかし、あのクラスを学びたいが、お茶の水までは行けない。そういう方々に、お茶の水のクラスを味わっていただくため、こうした「ネット・コース」を設けて、宣教拡大教育を目指しています。

今後、在宅で学べる信徒聖書学院として通学できない地域におられる方々のためネット・コースの学科を充実させていく予定です。ぜひ皆様のお申し込みをお待ちいたします。

副学院長 世良田湧侍

主と教会に仕える 同窓生たち②

小異を持って、大同につく

第二期生 平松庸一

私は、今は亡き中村彊牧師（日本基督教団根津教会）の強い期待で、1992年に入学し、1995年に卒業しました。企業勤めをしながらだったので、夜間の授業にはたいへい遅刻し、いつも一番後ろの座席で学んでいました。ある時、増田誉雄先生が何気なくおっしゃった「小異を持ったまま、大同につく」という文言が心に強く残りました。以後、ビジネスのなかで、教会生活のなかで、いつも大きな指針になっています。

卒業の翌年、サラリーマン生活にピリオドを打ち、経営コンサルティング会社を設立しました。98年には大学院に入学した上に、毎月1回100kmも離れた那須の地

で礼拝メッセージを取り次ぐことになったのです。ところが99年8月に、ついに出張先の奈良の地で倒れてしまいました。血液に関する自己免疫疾患による大腿部内出血にサルモレラ菌が感染するという非常に稀有な病気でした。気を失うほどの激痛と再出血が繰り返されるなか、敗血症を起こし何度もDICになりかける致命的症状のオンパレードとなったのです。2000年の1月にかけて3回も大手術を受け、総輸血量60リットル、二度の血漿交換をしましたが、右足を根本から失ってしまいました。

死線の危機は脱出しましたが車椅子に乗せられた片足の自分に、深い絶望を感じました。

ある日、いつものように家内が押してくれる車椅子で散歩中、ふと後ろを振り返ると、左足1本でケンケンしながら当時7歳の長男がついて来るのが目にはいりました。溢れる涙を抑えることができず来ませんでした。苦しんでいるの

は自分一人ではない。家族みんなが闘っているんだ。身体的に障害を持つ身となったが、家族の愛に支えられているハンディを誇っていいこうと、「小異を持つ」ことの勇気を知ることができました。（Ⅱコリント十二10）。また、60リットルという莫大な輸血を献血してくれた奈良県と大阪府の多くの方々は、クリスチャンではありません。99%のノンクリスチャンに支えられている自分に気づいたのです（ルカ十30、37）。そして、「大同につく」ことはどういうことなのかを知ることができるようになりました（Ⅰコリント九18、23）。

今、私は、義足という新たな足を得て、北は北海道から南は鹿児島まで自由に行き来することができようになりました。さまざま教会や学校で証し、聖書のメッセージをお伝えする機会も与えられています。2001年の4月からは、OBI理事会のメンバーに加えていただき、OBIに働く

主のみわざを体験する恵みにあずかっています。昨年9月には、これまで継続してきた研究に対して博士号が与えられ、今春4月から大学の教員として教育・研究活動に従事することとなりました。私には何一つ誇ることがないのに、神様は溢れんばかりの祝福を注ぎかけてくださるのです。

「主は命を 与えませり 主は血潮を 流しませり その死によりてぞ われは生きぬ…」（讚美歌332）。

神様はほんとうにいるんだ。この単純にして最も根源的な真実を、生涯かけて証していきたいと願っております。

こんな者をも、用いてくださる神様の愛に涙しつづ。



『パウロの足跡を訪ねて』①

市川北バプテスト教会牧師

藤原導夫

はじめに

お茶の水聖書学院主催による「聖書の世界」研修旅行が二〇〇五年春に行われた。三月十五日から二十五日までの十一日間にわたる日程であった。パウロの足跡を辿るということでギリシャとトルコの地が選ばれた。これらは、主にパウロの第二回と、第三回の伝道旅行の舞台となつた地域である。団長は聖書の地理に造詣の深い飯島勅牧師、私はチャプレンとして同行し、添乗員も入れて総勢二十名であった。

その旅のことを懐かしく思い起こしながら、パウロの伝道旅行そのものと、その跡を辿って私たちが体験させられた事柄などを重ね合わせるようにして記してみたい。実際には、学院での私の講義と旅行記のブレンドといった感じである。まず初回は「パウロとピリピ」、次回は「パウロとコリント」、最後は「パウロとエペソ」というタイトルのもとに三回シリーズで記すこととする。

「パウロとピリピ」

聖霊の導きによって

パウロの第一回伝道旅行（紀元四六〜四八年頃）は、シリヤのアンテオケ教会から祈りと支援を受けて、バルナバやヨハネ・マルコなどと共に実行された。その伝道の舞台は地中海に浮かぶキプロス島や小アジア南部地域であった。

第二回伝道旅行（紀元四九〜五一年頃）も初回と同じようにシリヤのアンテオケ教会から送り出されたが、今回パウロと同行したのはシラスであった。パウロたちはシリヤから陸路を取り北上した。旅の途中にデモテガルステラで一行に加わった。パウロはアジアで福音を伝えるつもりであったが、聖霊にそれをばまれて、不思議にもヨーロッパへと導かれたのであった。

事情はこうである。エーゲ海に面した小アジアの西端トロアスまでやって来たパウロはある夜、不思議な幻を見た。一人のマケドニヤ人が立って、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであった。パウロはただちに行動を起こしてマケドニヤに入り、当時のマケドニヤの主都であったピリピへと赴いた。

具体的名前そのものは記されていないが、「使徒の働き」において、ここから「私たち」章句が始まっていく。つまり、この文書を記したとされる著者ルカがこの時点からパウロ一行に加わって協力した事実が、「私たち」という表現において読み取れるのである。そうすると、パウロはピリピ伝道の折には、シラス、デモテ、ルカという三名の強力な同労者を得ていたことになる。

ピリピという名前は、有名なアレキサンダー大王の父であったマケドニヤ王フィリッポス二世が自分の名前に従って、紀元前三五六年に命名したとされる。パウロの時代、この街は軍事的にも通商的にも重要な位置を占め、マケドニヤ地方第一の町となっていた。

ルデヤとアンジスタ川

ピリピ伝道における初穂は女性であった。ある安息日のこと、川岸にあった祈り場でなされたパウロの説教に、小アジアのテアテラ市出身で紫布を商っていたルデヤという女性が熱心に耳を傾けていた。主はルデヤの心を開いてくださり、彼女はそのメッセージを受け入れ、家族と共にバプテスマを受けたのであった。

当時の「紫布」は非常に高価なものであり、王族、貴族、高官、金持ちなどが用いていたようである。そのような商いに携わっていたルデヤはそれなりの利益を得ていたことであろう。彼女はパウロ一行を自分の家に宿泊させたと記されているが、パウロたちの伝道を物心両面から支える有力な信徒の一人となっていたことであろう。

私たち学院生一行はピリピ郊外を流れるアンジスタ川を訪れた。そして、ここがかつてルデヤが洗礼を受けたと伝えられている場所へとガイドによって案内された。それは、周辺には何も無い静かな場所であり、二メートルほどの小川が静かに流れていた。中州にはルデヤの洗礼を物語る白い記念碑がひっそりと立っていた。私た

ちは川辺に降りて、その水に手を差し入れてみた。さわやかな冷たさが手先から全身へと伝わってきた。そこで、この川でルデヤは洗礼を受けたのだ！”言い知れぬ深い感動が心の中から湧き上がってきた。誰しもそうであったであろう。

私たちは川辺の石段に腰掛けて、共に讃美し、御言葉を読み、祈りの時をもった。そして、時空を超えてパウロやルデヤの世界に入り込んだ。多くの人の目に涙があつた。神の救いの恵みに心打たれながら、私たちは深く静かな異国の自然の中にとけ込んでいた。

パウロと牢獄跡

さらに、ルカが告げるピリピでの特筆すべき出来事は、看守の回心とその家族の救いである。パウロたちの伝道は占いの霊につかれた若い女奴隷の解放をもたしたが、それで利益を得ていた主人たちの怒りを買うこととなった。その結果、パウロとシラスはむち打たれ、投獄されてしまった。しかし、その痛みと苦しみの中で二人は神を讃美し、他の囚人たちはそれに聴き入っていた。

突如、地震が起こり牢の扉は開いたのに、不思議にも囚人たちは脱走しようとしなかった。その事実に驚愕した看守は、パウロの神を受けた入れ、家族そろって洗礼を受けたのであつた。ルデヤに続いてピリピ教会の礎となったであろう人々である。

ピリピに残るビザンチン時代に建てられた教会の遺跡から少し離れた一角に、ひっそりと隠れるようにその牢獄跡が残っていた。しかし、それは聖書にあるような数人の囚人が入れる牢獄にしては、あまりにも小さすぎるような空間であつた。パウロたちが囚われていたのは、その牢獄ではなかったのかもしれない。



それでも、そのはじめじめとしており、暗い感じの石室は、パウロたちの苦しみがどれほどのものであつたろうかということ雄弁に今に伝えているように思われた。アンジスタ川の水に手を差し入れて、ルデヤの洗礼を思つたように、はじめじめと冷たい石肌に手を触れて、パウロやシラスの苦しみを想像した。

後年、パウロが捕らえられてローマへと送られた時、そこで獄中書簡と呼ばれる「ピリピ人への手紙」が記された。その中で「主にあつて喜びなさい」とパウロはくり返し勧めている。それは、「喜びの手紙」とも呼ばれている。しかし、このように喜ぶことを勧めるパウロはまた獄に囚われていたのである。普通なら自分も喜び、他の人に喜ぶことを勧めることができるような状況ではない筈である。

かつて、ピリピにおいてむち打たれ、獄に囚われながら、そこで神を讃美したパウロの姿と信仰をピリピ教会の人々は忘れることなく語り継いできていたことであらう。ピリピ教会の人々が、手紙

を受け取って読んだ時に、かつてのピリピにおけるパウロの姿とローマにおけるパウロの今の姿が重なって映ったに違いない。それは、どのような状況下におかれようとも、主にあつて喜び、主を讃美する“姿である。

それをもって圧倒され、感動に捉えられ、私自身は時を忘れてその場に立ちつくしてしまっていた。しかし、旅のスケジュールは予定通りに進められていく。最後に残った私を急がせるガイドの声にうながされ、私は我に返つて一行の後を追つたのであつた。



OBI会計報告

御名を崇めます。

OBIは創立15周年を迎え、11月21日に感謝の集いを行いました。席上、羽鳥先生のメッセージ及び、山崎製パン(株)飯島社長、OCC村上理事長の祝辞を頂き、一層身の引き締まる思いがいたしました。現在OBIは在校生85名、卒業生150名を数えておりますが、首都圏のクリスチャン人口・教会数を思います時、信徒教育を標榜しながら、如何にも少ないものを感じ、申し訳ない思いで一杯であります。理由は一杯あります。しかし、御言葉に飢えている信徒は限りなくあると思います。祈りが足りません。知恵も絞っていません。身も心も献げていません。反省し、悔い改めねばならないと思います。このような思いに立つて会計報告を申しあげます。

第5期の一般の経済環境は改善

の傾向にあると思いますが、教養・文化的な面への資金投下は未だ鈍いように感じられます。そのような中であつて私たちは今期初めに受領致しました山崎製パン(株)の多額の献金を効果あらしめるべく、聖書科・音楽科共に内容の充実に努めました。また聖書科は夏季スクーリング、音楽科は募金コンサート等行事の目的を達成いたしました。更に、インターネットを活用する通信教育の新事業についても、モニターを採用し実態の把握に努めています。経営面においても、資金と業務の一層の効率化に、注力いたしております。何卒、関係各位の御指導、御鞭撻の程を御願い申し上げます。

◎第4期の特別献金御芳名録 (アイウエオ順、敬称略)

◆個人の献金

飯島勅 飯島延浩 伊藤淑美
国東恵子 須子都 羽鳥 明
増田誉雄 三浦喜代子

◆団体の献金 山崎製パン(株) 第11回卒業生

◆維持会員

有田貞一 有田美栄子
飯島多稼夫 猪狩友行
小野沢恵子 金本悟 木下順子
国東恵子 窪井節子 窪田淳子
黒澤すぎの 小林喜久男
斉藤とし子 佐藤敬 佐野謙次
佐野寿美子 須子都 関節子
世良田湧侍 田中恵子 中川和代
浪井弘子 西満 羽鳥明 森登
平松庸一 福井誠 藤原導夫

増田誉雄 増尾善文 松岡常子
三浦喜代子 三浦秀弥 森本馥
宮本三枝子 依田和子 脇阪勇

◆賛助会員

阿江美千代 絵鳩彰 猪狩友行
奥津晃 加賀谷文子 加茂康一
菊田洋子 木村寿子 国東恵子
近藤逸人 近藤はるみ 佐藤和恵
佐野謙次 杉山礼子 滝島一穂
中島總一郎 日名富子
福井ちよ 藤倉充子 藤村陽子
真尾邦子 三浦秀弥 山本敏夫
吉田加代子
◆団体会員
中山教会

OBI第5期中間財務状況
(単位：千円)

科目	金額
前期繰越金	2,038
当期収入	3,563
行事収入	1,353
献金収入	8,643
その他収入	57
収入計	13,616
当期支出	
学事支出	7,951
行事支出	1,197
経費支出	5,587
その他支出	57
支出計	14,792
後期繰越金	862